

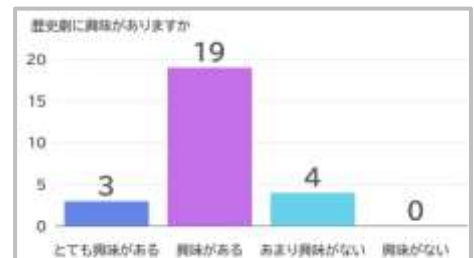
26	新城	東郷東小学校	アガタ ミキ 名前 安形 美樹
分科会番号	20	分科会名	総合学習

【研究題目】 東小の伝統行事で地域の人とつながり、生まれ育つ地を愛する子を目指して
—6年生 総合的な学習の時間「450年間つながれてきたもの～長篠・設楽原の戦い～」の実践を通して—

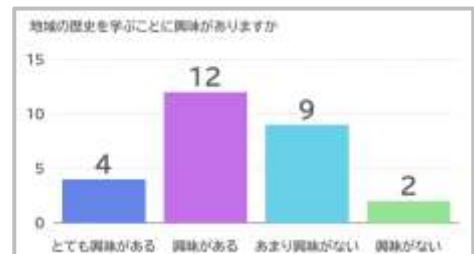
【研究要項】

1 主題設定の理由

本校では、長篠・設楽原の戦いから地域の歴史を学ぶことや、伝統行事を合わせて「設楽原学習」と位置付け、本校の学びの特色の一つとしている。そこで、本学級6年生に設楽原学習についてアンケートを行った。資料1-1、1-2から、地域の歴史への関心の低い子も、武将になりきる歴史劇への関心は高い。一方、歴史劇に「あまり興味がない」と回答した1割の子は、地域の歴史を学ぶことにも「あまり興味がない」「興味がない」と回答している。この結果から、子ども自身が地域の歴史を学ぶ価値を見いだせるような設楽原学習を展開したいと強く感じた。また、話し合いでは全員から「伝統行事を成功させたい」「地域の人に教わりたい」と声が挙がった。本学級は、伝統行事の成功を願う気持ちや、人と関わることへの関心が高いことが分かった。そこで、東小の伝統行事を中心とし、地域の人から地域の歴史を学ぶ設楽原学習を展開すれば、地域の歴史を学ぶことへの関心が高まるのではないかと考えた。さらに、地域の人からの学びを発信したり、学びに対する地域の人々の声を聞いたりする場を設ければ、地域の人々の思いに気づき、自身の日々の生活や未来をよりよくしていこうという思考につながるのではないかと考え、学校と地域がつながり、子どもたちの地域への愛着を育むような授業を展開したいと切に願い、研究主題を設定した。このような子どもの姿を目指し、本研究の実践を進める。



資料1-1「設楽原学習について」のアンケート



資料1-2「設楽原学習について」のアンケート

2 主題にせまる研究の構想

(1) 研究の仮説

東小の伝統行事を通して、地域の人と関わりながら地域の歴史を学ぶ場を設定することで、子どもたちは地域の歴史への関心を高め、自ら学びを深めていこう。さらに、子どもたちが学びを発信し、学びに対する地域の人からの感想や反応を受け取り、学びを振り返る場を設定することで、子どもたちは新たな気づきや地域への思いを、自分の言葉や行動で表現するだろう。

(2) 研究の手だて

ア 伝統行事を軸とした単元構想～地域の歴史への関心を高める～

伝統行事の歴史劇を成功させたいという気持ちが強いという学級の実態を生かし、東小の伝統行事を単元構想の中心に位置付け、地域の人から学んだことを基に歴史劇を創作する学習を展開すれば、子どもたちは地域の歴史への関心を高め、歴史劇の内容や台詞を考えるために、地域の歴史を意欲的に学び進めることができるだろう。

イ 地域の人から学ぶ場の設定～視点を定め、学び深める～

地域の人から地域の歴史を教わりたい気持ちが強いという学級の実態がある。そこで、地域の人から地域の歴史を聞くことで、子どもは興味や関心を高め、学ぶ視点を定めて、地域の歴史を自ら学び深めていこう。特に令和7年は、長篠・設楽原の戦いから450年目で、新城市全体で記念事業が行われているため、地域の動きを生かすこととする。

ウ 学びを発信し、地域の人々の感想を受け取って振り返る場の設定～気づきや地域への思いを自分なりに表現する～

地域の歴史を学ぶ価値を見いだせないという学級の実態がある。そこで、伝統行事や地域の活動を通して、地域の歴史に関する知識や学びを発信し、地域の人からの感想や反応を受け取って振り返る場を設定すれば、この過程の中で、子どもたちは、地域の歴史を学ぶ価値を見だし、新たな気づきや地域への思いを、自分の言葉や行動で表現するだろう。

(3) 単元構想図（次頁に掲載）

(4) 研究の方法

2人の抽出児童A・Bを中心に、発言内容や発言時の様子、ノートに記入した考えから仮説を検証していくこととする。

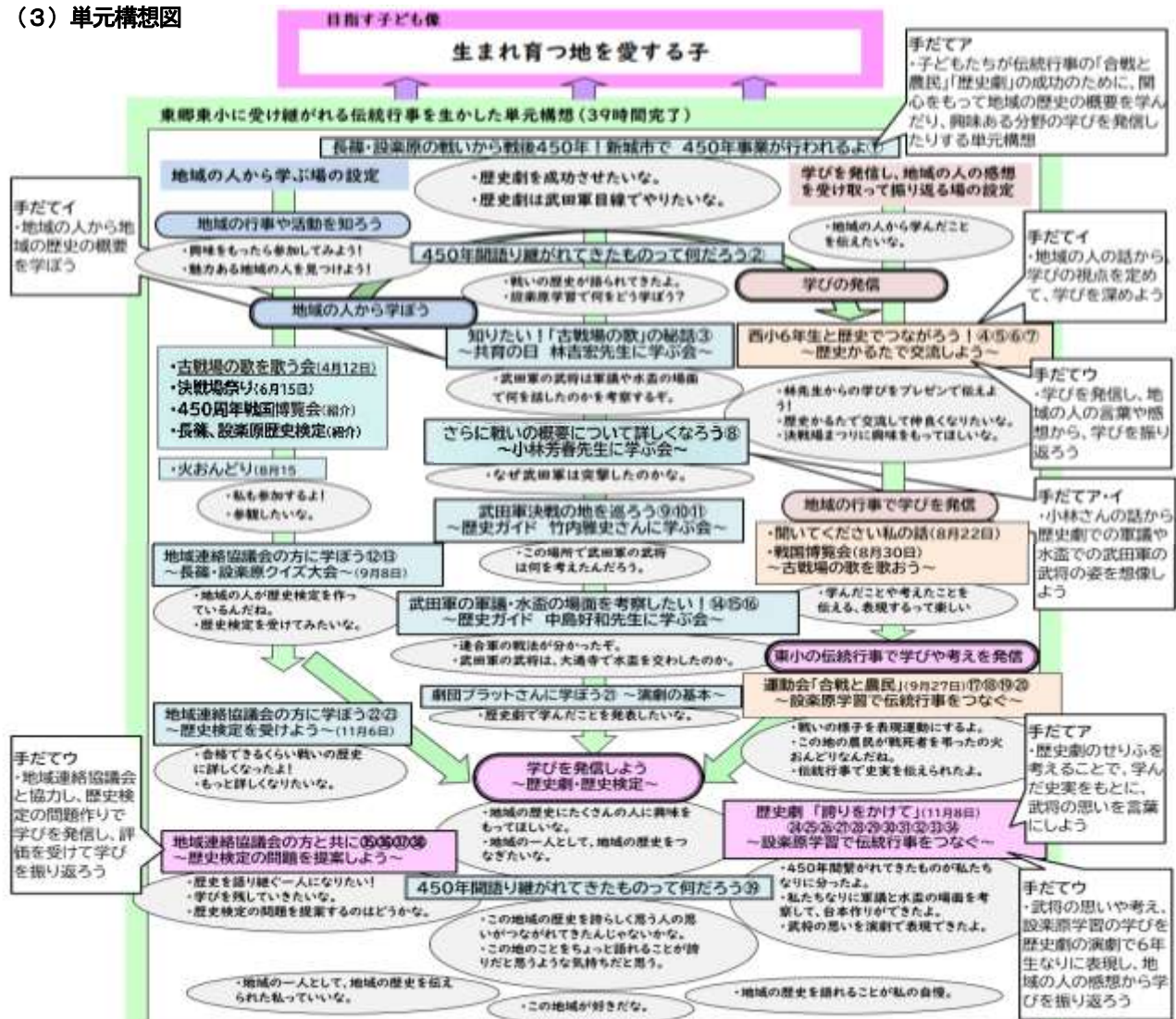
<児童Aの実態と願い>

児童Aは、地域の行事「火おんどり」に毎年家族で参加している。火おんどりは戦死者を弔う地域の行事で、450年間続いている。資料2から、地域の歴史を学ぶことや伝統行事への関心が高いことがうかがえる。話し合いで、児童Aの「設楽原の戦いから450年もの時がたっているのになんで伝え続けられているのか」（資料2）の問いに対し、誰も納得のいく答えを出すことができず「450年ものなぜ語り継がれてきたのか」を知りたいという思いをもった。児童Aが疑問を解き明かそうと地域の人と関わる中で、歴史劇の成功に向かい、地域の歴史を学ぶ視点を定めて学び深める姿や、地域の人々の思いに触れて地域への思いを育んでいく姿に期待したい。

昔から6年生の歴史劇を見て自分も6年生になったので武将たちの気持ちや想像しながら演技をしてみたいと思っています(くわしく調べよう)。今年12月設楽原の戦いから450年もの時がたっているのになんで伝え続けられているのか疑問になります。

資料2 設楽原学習に対する児童Aの思い

(3) 単元構想図



＜児童Bの実態と願い＞

児童Bは、地域の歴史に関する地域の行事に参加したことはない。しかし、興味をもった分野にはこだわりをもって追究的な学習を進めることができる。資料3からわかるように、設楽原学習への関心がとても低いことが分かった。このような児童Bが地域の人と関わりながら学ぶ中で、地域の歴史への関心を高め、地域の歴史を学ぶ価値を見いだしていく姿への変容を期待したい。

3 研究の実践と考察

(1) 「長篠・設楽原の戦いが450年もなぜ語り継がれてきたのか」

と疑問をもち、450年事業に参加した児童Aと、地域の人の言葉から学びの視点を定めた児童B

ア 地域の人から、長篠・設楽原の戦いについて学ぶ【手だてア・イ】

「450年もなぜ語り継がれてきたのか」という疑問を解き明かすために、戦いの概要を知り、歴史劇の目標を決めて伝統行事の成功を目指そうと子どもは考えた。児童Aは学校に配布された450年事業の「設楽原の古戦場を歌おう」に参加を決めた。本校で歌う機会は失われていたが、以前は戦いの様子を後世に伝える歌として本校や地域の行事で歌われていた歌である。この会を通して児童Aは林吉宏さんと出会い、自ら講師の依頼をし、講師に学ぶ会を開いた。講師は「君らは何も知らんのは何でだん。生まれ育つこの地のことをちょっと語れる、それがいいんじゃないか」(資料4・講師1)と語り、児童Aは、「…歌のことは知らないし、この土地のことを語れるようになりたいけど、知識がないっていうか…」(資料4)と言葉にした。ノ

私は昔から歴史劇にはあまり興味がなく、小学生になったら調べものもできなくていいやと思っていた。歴史に対して関心が全くない感じでした。くすの木フェスタはなるべくせりふが少ないほうがいいかなと思ったり、あまり演技したくないと思っています。

資料3 設楽原学習に対する児童Bの思い

- 講師1：古戦場の歌は50年前に作られた。1990年から続く決戦場祭りで、東小の子どもたちが歌い継がてきた。…(省略)…5番まであるんだ。戦って、死をかう農民がいて、かうために火おんどの儀式が生まれた。鎮魂の思いが戦後も受け継がれてきたけど、君らは何も知らんのは何でだん。生まれ育つこの地のことをちょっと語れる、それがいいんじゃないか。
- 児童A：毎年火おんどのには参加してるけど、歌のことは知らないし、この土地のことを語れるようになりたいけど、知識がないっていうか…。
- …(中略)…
- 講師5：君たち考えたことはあるか、なぜ武田軍は突撃したのか、無敵の騎馬隊だから、絶対に勝てると思って突撃したのか。
- …(中略)…
- 講師8：武田の武将は信玄を慕った。その信玄が死に、勝頼が武田軍を指揮することになった。勝頼は父信玄を尊敬していたが、勝頼は本来家督を継ぐ立場ではなかったんだ。兄たちが亡くなったことで武田家を継ぐことになった。勝頼は父信玄が落とせなかった高天神城を落とす。父を越えたいという思いがあったんだらう。…(中略)…
- 講師10：勝頼と武将たちは戦い前の軍議で何を話したと思う。軍議の後、勝頼をのぞいて馬場、内藤、山県、土屋は水壺を交わすんだ。何を話したと思う。君たちなりに戦いを考察して軍議、水壺で何を話したか、6年生なりに答えを出してみよう。会話なんて記録がない。(以下省略)

資料4 講師に学ぶ会(6月7日)の授業記録 抜粋

設楽原の戦いの地域行事や祭りも
伝統として受け継がれていること
が乙女も魅力に感じました。私は
古戦場の歌を歌う会に参加したい
と思うので、この歌を知らない人
たちに少しでも知ってもらいたい
と思います。

水杯の会話を考慮して、それとされた時は、昔の事なくて分かった。いじょうと照う事柄もがあつた。これだ。武將達はよくの事をし、どんな戦術もあつたのを知りた。と思ひました。武田軍と榊田軍の戦法は知れたので、次は気持ちを知りたいです。

[illegible]

児童B：「ろ」老將の言 勝頼は 封じたり
 信玄の時代よりも領地を広げたことから、このままい
 けば最強になると思った勝頼は、家臣たちの反対を押し
 切って戦うことを命じたのだ。
 児童C：「ぬ」ぬかるみに 馬もしりごむ 連奥川
 無敵の騎馬隊を誇る武田軍でしたが、馬たちは馬防柵
 の前の連奥川に足を滑らせて思うように戦うことが
 できません。… (中略) …
 児童A：「も」もっせもっせやーれもっせの 火おんどり
 火おんどりは戦いの戦死者を弔うために450年間絶え
 ることなく行われています。
 児童D：「ふ」不思議にも 蜂の大群 姿消す (以下省略)

合戦と農民という表現運動があります。…(中略)…
西小の六年生のみなさんとのカルタ会はとても盛り上がりま
した。なんと興味をもってくれた西小の子が決戦場祭りに参加
をしてくれたのです。学校が違っても、歴史を通してつながる
ことができる。歴史ってすごい!…(中略)…

林先生は…「…今は450年前、日本の歴史を大きく変えた出来事を知らん子が多いのはなんでだん。生まれ育つこの地のことををちょっと詳しく語れる、それがいいんじゃないか」とおっしゃられました。…(中略)…
…450年間戦いの歴史がつながってきた理由…(中略)…
そして、歴史でまだ知らない誰かとつながるみりょくがあるからではないでしょうか。生まれ育つこの地のことををちょっと詳しく語れることが、私たちの誇りだから。戦いの供養をし続けることも、私たちにしかできないこと。…(中略)…
そんな地で育つことこそ、私たちのじまんです。

児童Bは、講師の話から武田勝頼に興味をもち、史実から勝頼の気持ちを想像する自主学習を行った。ノートの左に「信玄の時代より領地を広げた」と史実を書き、右には信玄に対して「なんでそんなに大将をやらせてくれないんだ！よし！すごさを

[illegible]

- 3 -

の話から、「信玄と勝頼の関係や・勝頼に興味を持ちました」（資料7）と、関心をもったからこそ、勝頼が戦う決断をした背景にまで目を向け始めたかと捉えられる。交流会の振り返りには「真剣に聞いてくれてすごく安心しました」（資料11）と書いた。「すごく安心」の言葉から、歴史劇に対する関心の低さの背景には、表現への自信のなさや不安があると捉えることができた。

（2）武田軍の武将たちの行動から、武将たちの気持ちを想像する児童A、児童B

ア なぜ武田軍は突撃したのか～軍議での勝頼の姿 児童B～【手だてア・イ】

子どもたちは、講師の「勝頼と武将たちは戦い前の軍議で何を話したと思う…君たちなりに戦いを考察して軍議、水盃で何を話したか、6年生なりに答えを出してみよう」（資料4・講師10）の言葉を受け、歴史劇の軍議と水盃の場面の台詞を考えようと意気込んだ。まず、講師の「なぜ武田軍は突撃したのか」（資料4・講師5）を明らかにすれば、決戦前夜に武田軍が軍議を開き、勝頼が家臣に反対されながらも決戦の宣言するやりとりを想像して台詞にできると考えた。そこで、子どもたちは、地域の歴史に詳しい竹内雅史さんと小林芳春さんに講師を依頼し、武田軍の突撃の背景について学んだ。小林さんは、「決戦の前、勝頼は父信玄が落とせなかった難攻不落とされた高天神城を落とした。勝頼は父を越える力をもっているかもしれないと思う家臣もいたはず」「よく考えてみてください。信玄を慕い仕えてきた家臣たちは、勢いある勝頼に危うさも感じただろう…若い勝頼の勢いだけの判断に任せるのはどうだろうか」（資料12）と、語られた。その後、児童Bは「なぜ武田軍は突撃したのか」に対する自分の考えを「…戦うしかなかった状況だったのかな…」「高天神城を落としても、やっぱり、家臣たちは信玄派の人たちもいたと思う…信頼してもらったため…逃げてられないという気持ち…」（資料13）と書き、高天神城を落としても、勝頼が信玄を慕う家臣に信頼してもらうには連合軍と戦うしかないことを読み取ったことが分かる。続けて、「父信玄への尊敬もあったし、信玄のようにならない」というプレッシャーもあった」（資料13）と書いたことから、信玄は勝頼にとって偉大な父であると同時に、重圧を感じる存在であることを読み取っている。これは、小林さんの「よく考えてみてください。…若い勝頼の勢いだけの判断に任せるのはどうだろうか」の言葉から信玄を慕う家臣に目を向けたことで、連合軍から逃げてはいられない気持ちや信玄の存在に重圧を感じる勝頼の姿を想像したからこそ、「戦うしかなかった状況だった」とその時の状況を理解し、突撃の理由を考えることができたといえる。

発表や表現することを選んできた児童Bだが、勝頼について知る程、その姿に魅かれて歴史劇では勝頼役に立候補した。児童Bが主役を選ぶとは学級の誰もが予想しておらず、驚きの声と拍手が起こった。児童Bは台詞を考える際に、頭首として勝頼の姿を想像することにこだわり、戦いを決断する際に家臣に語った台詞を「わしはどうあがいても皆がしたった信玄のようにはなれまい。しかし、今や武田家の当主はわしだ」（資料14）と想像した。「どうあがいても」の台詞で、勝頼が信玄を尊敬する気持ちと、信玄を慕う家臣の気持ちを表現し、「当主はわしだ」の台詞で、信玄を越えたいと思う気持ちを表現した。また、要となる家臣が討ち死にし、負けを認めて甲斐に逃げる決断をした勝頼の気持ちを、「家臣の命と引き換えに私は生かされた…私は、自分の誇りのためだけに家臣を戦わせたのか…いや違う無敵の騎馬隊と言われる武田の誇りをかけて、戦う決断をしたのだ！」（資料14）と書き、勝頼が一人で心の葛藤を話す場面を入れたいと願い出た。無敵の騎馬隊を誇りに思う姿勢こそが戦う決断につながったと解釈したことがうかがえた。地域の歴史や歴史劇に関心がなかった児童Bが、講師の話に関心をもち、自ら学びの視点を決めて学び深める姿へと変容する姿を捉えることができた。

イ なぜ武田軍は突撃したのか～水盃での家臣の姿 児童A～【手だてア・イ】

信玄を慕った家臣の山県、馬場、内藤、土屋たちは軍議の中で、勝頼の突撃の決断を止めたのではないかとはいわれている。そして、軍議の後、山県、馬場、内藤、土屋は、今生の別れを惜しみ水盃を交わす。山県は武田家を代表する武田四天王の一人で、「赤備え隊」と呼ばれる精鋭部隊を率いた名将である。小林さんから「家臣の志村が山県の首を連合軍に渡してはなるものかと、自ら山県の首を切って、甲斐に持ち帰った。」

（資料15）と教わった。児童Aは、山県は家臣に慕われる武将だったと捉えて魅力を感じ、山県の役に立候補した。そして、山県についての調べ学習を行った。その中で、信玄の「老人には経験という宝がある」（資料16）という名言を見つけ、児童Aは、信玄を慕う山県の姿と重ねた。そして、軍議で勝頼に反対をする台詞を、「老臣になるまで武田家に全てをかけ、奉げてきたわれらを信じてはくれないか」（資料16）と、想像した。その後、水盃での山県の台詞を、「もうこ

らないところが分かりました。西
小の子達に説明している時は、緊
張しましたが、西小のみんなが真
剣に聞いてくれてすごく安心しま
した。

資料11 児童Bのかかるた交流会の振り返り

講師12：決戦の前、勝頼は父信玄が落とせなかった難攻不落とされた高天神城を落とした。勝頼は父を越える力をもっているかもしれないと思う家臣もいたはず。でも、よく考えてみてください。信玄を慕い仕えてきた家臣たちは、勢いある勝頼に、危うさも感じただろう。このまま若い勝頼の勢いだけの判断に任せるのはどうだろうか。誰か分かる？

児童B：山県や馬場ですか？

講師13：そう、山県、馬場、内藤とかね。無敵の騎馬隊の名将たちだ。…（省略）…

資料12 講師の小林さんの話

勝頼は軍議がないながら戦う決断をしたのは、戦うしかなかった状況だった。高天神城を落としても、やっぱり、家臣たちは信玄派の人たちもいたと思う。武田の領地のためなら逃がすわけないという気持ちがあるから、城のあとに作戦にしたと思います。また、父信玄への尊敬もあったし、信玄のようにならないというプレッシャーもあったと思います。

資料13 突撃に対する児童Bの考え

【軍議 勝頼が家臣に自分の思いを話した場面】
わしはどうあがいても皆がしたった信玄のようにはなれまい。しかし、今や武田家の当主はわしだ。
【軍議 家臣の反対を押し切る場面】
家臣の命と引き換えに私は生かされた。私は、自分の誇りのためだけに家臣を戦わせたのか。いや、違う無敵の騎馬隊と言われる武田の誇りをかけて、戦う決断をしたのだ！

資料14 勝頼の台詞の検討

講師13：そう、山県、馬場、内藤とかね。無敵の騎馬隊の名将たちだ。…（省略）…

講師14：武田四天王の一人の山県は、信玄を慕っていた。赤備え隊を率いて戦った。しかし、連合軍に討たれてしまう。そこで、家臣の志村が山県の首を連合軍に渡してはなるものかと、自ら山県の首を切って、甲斐に持ち帰った。志村が聞いたことがあるだろう。芸人の志村けんのお祖父にあたるのが、この志村又左衛門だ。（以下省略）

資料15 講師の小林芳春さんの話

【軍議 勝頼の「戦う」という考えに反対する山県の台詞】
信玄様はよく、わしに「老人には経験という宝がある」とおっしゃられた。老臣になるまで武田家にすべてをかけた、奉げてきたわれらを信じてはくれないか。

資料16-1 児童Aが考えた山県の台詞（一部）

児童Aのグループは、水盃の出来事を資料24のような問題とした。東郷地域協議会から、水盃を誰がどの位置で交わしたかは諸説あるが、武将の立ち位置はこれまでにない視点からの問題で面白いと評価され、歴史検定の中級編として採用された。児童Aは、資料25のように振り返った。学びを発信することで、より多くの人の関心を高めたいという思いを抱くことができたといえる。

4 仮説の検証

(1) 手だてア 受け継がれる伝統行事を軸とした単元構想について

児童Aは「…なんで伝え続けられているのか」(資料2)という疑問をもち、語り継がれる理由や軍議と水盃の場面を歴史劇で発表しようと学ぶ意欲を高め、林さんの学び会を開いた。また、小林さんの「家臣の志村が…」(資料15)の言葉から、武田軍の山県への関心を高め、歴史劇の水盃の場面での山県の台詞を、「…死んでも分(わ)すれない」「赤備えの誇りをかけて…」(資料16)と想像した。台詞を考える中で仲間と共に命をかけて戦った事実が山県の誇りであったと学びを深めていった。

児童Bは、「勝頼と武将たちは…答えを出してみよ…」(資料4・講師10)の言葉から、「…勝頼に興味をもちました」(資料7)と、勝頼に関心をもって学び進め、歴史劇の軍議での勝頼の台詞を、「わしはどうあがいても…武田家の当主はわした」(資料14)と、信玄を慕う家臣や、勝頼の気持ちを想像し、「…武田の誇りをかけて、戦う決断をしたのだ!」(資料14)と、自分たちの戦い方を信じ抜いた姿勢が戦いの決断になったと学びを深めた。

以上から、受け継がれる伝統行事を軸とした単元構想は、歴史劇の内容や台詞を考えることで、地域の歴史を学ぶことへの関心を高め、意欲的に学び進めることができ、有効だったと考える。

(2) 手だてイ 地域の人から学ぶ場の設定について

児童Aは、講師の「…生まれ育つこの地のことを…」(資料4・講師1)の言葉を受け、「…とても魅力に感じました」(資料5)と、地域の歴史を語ることに魅力を感じ、かるた交流会では、「火おんどりは…」(資料8)と地域の行事に視点を定め、発表した。また、小林さんの「家臣の志村が…」(資料15)の言葉から、「老臣になるまで…」(資料16)と、信玄を慕う山県の思いを想像できたからこそ、「老人には経験という宝がある」という信玄の名言と、山県の姿を重ねて台詞を考えることができた。

歴史への関心がない児童Bだったが、講師の資料4・講師8の話から勝頼に視点を定め、軍議「家臣たちの反対を押し切って戦うことを命じた」背景に目を向け、「仲間にすごさを見せてやる」「このままいが最強」(資料10)という気持ちがあったと想像した。また、「なぜ武田軍は突撃したのか」を、小林さんの「…若い勝頼の…」(資料12)の言葉から、「…戦うしかなかった…」「…信玄派の人たちもいた…逃げてられない…」(資料13)と想像し、「…尊敬もあった…プレッシャーもあった…」(資料13)と、信玄は重圧を感じる存在であったと勝頼の心情を読み深めた。

以上から、地域の人から地域の歴史を学ぶ場の設定をしたことで、子どもは地域の人語りから興味や関心をもち、学ぶ視点を定めて地域の歴史を学び深めていくことができ、有効だったと考える。

(3) 手立てウ 学びを発信し、地域の人々の感想を受け取って振り返る場の設定について

児童Aは、「聞いてください私の話」で、「…歴史ってすごい」(資料9)と、歴史が人と人をつなぐことに気付いた。また、講師の「…生まれ育つこの地のこと…」(資料4・講師1)の言葉の思いを振り返り、「生まれ育つ…私たちの誇り」「…私たちにしかできない」「…私たちのじまん」(資料9)と、地域の歴史を学ぶ価値を見だし、地域を思う気持ちを表現した。また、歴史劇後の資料18から、「…歴史をつなぐ一人になれた…」(資料19)と、自分が関わり受け継ぐものとして地域の歴史を捉えた。歴史検定の問題作りでは、「これまでの検定にはない視点」の言葉を受け、「…こうけんできたら…」(資料25)と振り返り、自分なりに地域への思いを表現できた。

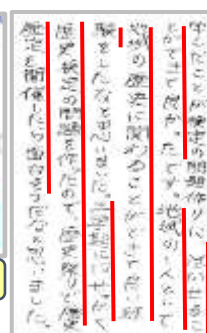
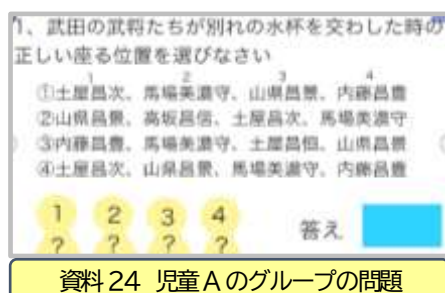
児童Bは、かるた交流会後、「…すごく安心しました」(資料11)と書き、表現への自信のなさがかがえたが、歴史劇後、資料20の感想を受け、「…歴史のある地域で学べて…」(資料21)と、地域の歴史に関心をもち、地域の歴史を学び深めたことを表現できた喜びを書いた。そして、「…語り継ぐことに貢献していきたい」(資料21)と、地域の歴史を学ぶよさや価値を見いだした。歴史検定の問題作りでは、「学んだことを一文で説明でき」の言葉を受け、「…地域の一人…よい経験…」(資料23)と、地域とつながる喜びを感じ、「…歴史祭り…面白そう」(資料23)と、新たな学びの発信を試みようとする姿へと変容した。

以上から、学びを発信し、地域の人からの感想や反応を受け取り、振り返る過程の中で、子どもたちは、新たな気付きや地域への思いが生まれ、自分の言葉や行動で表現することができ、有効だったと考える。

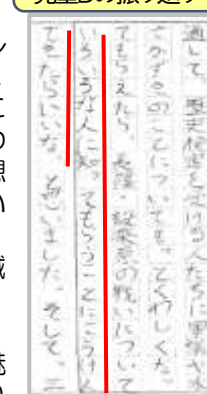
5 研究の成果と今後の課題

本研究後の児童A・Bのノート(資料26・27)から、地域の歴史を学ぶことで地域の人となりが、地域の歴史を学ぶ価値を見だし、生まれ育つ地への愛着を育んだことが確認できた。

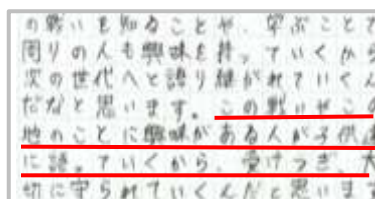
これからも、子どもの思いを軸にし、子どもたちが生まれ育つ地に育つよさを実感できる実践のあり方を研究していきたい。



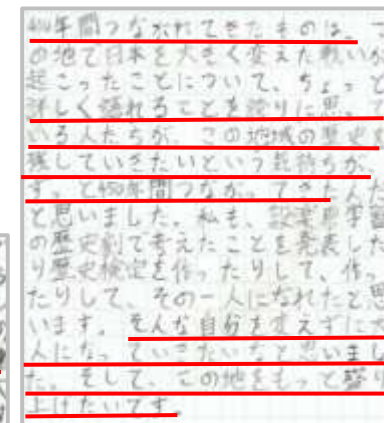
資料23
児童Bの振り返り



資料25
児童Aの振り返り



資料27 児童Bのノート



資料26 児童Aのノート